



1 歌川広重「東都名所 亀戸梅屋舗ノ図」 ミネアポリス美術館蔵



2 歌川広重「名所江戸百景 亀戸梅屋舗」 シカゴ美術館蔵

春の足音が近づいてきました。桜や桃など、さまざまな花が思い浮かぶ季節ですが、なかでも梅は、他の木々に先駆けて花を開くことから、春の訪れを知らせてくれる花として古くから愛されてきました。

今も各地に梅の名所はありますが、江戸時代にとりわけ人気を集めたのが、現在の東京都江東区亀戸にあった「亀戸梅屋敷」です。もともとは伊勢屋彦右衛門という商人の別荘で、庭にはおよそ300株もの梅が植えられ、花の盛りにはたくさんの江戸っ子たちでにぎわいました。ところが明治43年(1910)、隅田川の氾濫によって梅はすべて枯れてしまい、梅屋敷は廃園となります。今では当時の面影はなく、石碑が往時をしのばせるのみです。なお、近くに亀戸梅屋敷という名前の商業施設がありますが、かつての庭園跡とは500mほど離れており、直接の関係はありません。

そのにぎわいは浮世絵にも生き生きと描かれています。たとえば歌川広重の「東都名所 亀戸梅屋舗ノ図」**1**には、庭の水茶屋に集う人々の姿が広がります。まだ肌寒い季節とあって、頭巾や襟巻きで寒さをしのぐ人もちらほらいます。梅を見上げて思わず口を開く人、縁台に膝を組んで座っている人、おしゃべりに花を咲かせる人など、梅屋敷での楽しみ方は実にさまざまです。

ちょっと気になるのが、右から二番目、筆を手に紙に何かを書こうとしている男性です。実は、梅を眺めて心に浮かんだ和歌か漢詩をしたためようとしているところ

です。当時は、自作の詩歌を書いた短冊を梅の枝に結びつけて楽しむ習慣がありました。よく見ると、梅の枝先には幾枚もの紙が揺れています。花を愛でるだけでなく、心に思い浮かんだ言葉を添えて味わうのも、江戸っ子たちの粋な梅の楽しみ方でした。

同じく歌川広重による「名所江戸百景 亀戸梅屋舗」**2**も見逃せません。オランダのポスト印象派の画家ゴッホが模写をしたことでも知られる名作です。画面手前に大胆に配された太い幹は、亀戸梅屋敷きっての名木「臥龍梅」。龍が地に臥すような姿から、水戸黄門こと徳川光圀によって命名されたと伝わっています。

枝に咲く白梅にも目を向けてみましょう。花びらの内側を見せるもの、外側の萼を見せるものなど、さまざまな角度から描き分けられており、広重が丹念に梅を観察していたことが伝わってきます。大胆な構図と繊細な花の表現が響き合い、私たちが江戸時代の春へとやさしく誘ってくれます。

日野原 健司(ひのはら けんじ)プロフィール

1974年生まれ。千葉県出身。慶應義塾大学大学院文学研究科前期博士課程修了。現在、太田記念美術館主席学芸員、慶應義塾大学非常勤講師。江戸時代から明治時代まで、浮世絵の歴史を幅広く研究しつつ、妖怪や園芸、旅といったジャンルの研究にも取り組んでいる。太田記念美術館にて「江戸園芸花尽し」展(2009年)を担当。著書に『浮世絵でめぐる江戸の花』(平野恵氏との共著、誠文堂新光社)、『ようこそ浮世絵の世界へ』(東京美術)など。



特集 今、つくり手が注目する「葉」の力

大森 敬子・大森 謙太郎(大森ガーデン)

NURSERIES スカイブルー・セト

Comment 坂口 則夫・央戸 克博

浮世絵歳時記 ～花と緑と人～ 日野原 健司

葉の持つ繊細な形や質感、色の違いは、より環境に調和したランドスケープを実現する。



特集 今、つくり手が注目する「葉」の力



十勝の厳しい自然環境と向き合いながら、植物の真の魅力を発信し続ける大森ガーデン。生産販売のみならず、モデルガーデンで庭での本来の姿にも向き合う、大森敬子さんと謙太郎さんに、今、改めて注目したい、植物の「葉」についてお話を伺いました。

プルモナリアやクルマハソウの葉が美しい日陰のガーデン。葉の魅力が際立つ。

変化する気候と、植物の適材適所

～大森ガーデンのモデルガーデンは、生産されている植物の「育った姿」を見せる場として始まりましたが、開設当初から変化したことはありますか。

大森 謙太郎さん（以下 謙太郎さん）：植物の魅力を知っていただくという根本は変わっていません。

大森 敬子さん（以下 敬子さん）：見せ方は進化していますね。2008年のオープンから18年ほど経ちますが、同じ植物でも多様な見せ方を試してきました。近年の十勝は夏に37度を超える日が続く一方で、冬は氷点下20度以下にもなります。寒暖差が60度近くにもなり、環境は厳しさを増しています。



1 ハコネクロア マクラ 'オレオラ'
Hakonechloa macra 'Aureola'

～JGN会員が多い関東でも、猛暑が常態化しています。

敬子さん：暑さだけでなく、寒さへの耐性も同様に大切です。これからはその両輪で考えていかなければなりません。例えば、涼しい地域なら日向で育つ植物も、暑い地域では半日陰に植えるといった「適材適所」の提案をしていくことが重要だと考えています。皆さんにどう紹介していくかも大事にしたい点です。

日陰を彩り、庭の骨格をつくる「葉」の力

～今年のJGNのテーマでもある「葉」について、伺います。観賞価値が高く、おすすめの植物はありますか？

敬子さん：ルーコセプトラムは、日陰でも色が非常に美しいです。ホスタ以外で日陰を演出できる貴重な存在です。また、グラス類は葉だけでなく穂も魅力的で、季節を通じて草姿の変化が少ないので、庭の構造をつくる上で安定した要素になります。最近注目されている自然風の植栽には欠かせない存在です。

～おすすめのグラス類には、どのようなものがありますか。

敬子さん：日陰であれば、葉がイエローのハコネクロア「オールゴールド」（フウチソウ黄金葉）、緑とイエローの斑入り葉のハコネクロア マクラ「オレオラ」（フウチソウ斑入り）**1**などが庭を明るくしてくれます。ハコネクロアはその他、緑葉や葉先が赤くなるもの等バリエーションが豊富で美しいですね。テストガーデンでは、あえて適地ではない直射日光の当たる場所にも植えてみて、どの程度の環境まで耐えられるかを試しています。



5 ユーホルビア 'ファイヤークロー'
Euphorbia griffithii 'Fireglow'

専門家が、今、植えたい「葉」は

～他に、今注目している品種はありますか。

敬子さん：日陰でライム色が映えるルーコセプトラム・ジャポニカム「オーレウム」**2**は、背丈も50～60cmと扱いやすくおすすめです。また、暑さに強いパニカムや、穂が美しいスティパの系統も、庭に動きを出してくれます。

謙太郎さん：存在感のあるものでは、リグラリアや、黄緑色の花と葉の対比が美しいユーホルビア「クラリスハワード」もいいですね。

敬子さん：意外と活用されていないのが高性種のセダムです。シルバーがかかった葉の「マトロナ」**3**や、花色が変化する「オータムジョイ」、黒っぽい葉の「ベラジェームソン」など、花がない時期も造形的な美しさがあります。乾燥に強く、水やりもほぼ不要なので、グラベルガーデン（砂利の庭）などにも最適です。

庭のフォーカルポイントをつくる植栽のコツ

～葉の力で視線を集めるフォーカルポイントをつくるには、どうすればよいでしょうか。

敬子さん：フォーカルポイントをつくりたい時は、バラバラに植えずにある程度まとめてグルーピングして植えるのがコツです。花ばかりを並べると色が散漫になりますが、葉物は庭の和み役や引き締め役になります。例えばグラスのミスカンサス「コスモポリタン」**4**は、一か所にまとめて植えると遠目からでも白く輝いて見え、見事なフォーカルポイントになります。

謙太郎さん：ユーホルビア「ファイヤークロー」**5**や、ペルシカリア・アンプレクシカウリス「ファイヤーテール」**6**なども、ダイナミックな景色をつくってくれますね。

敬子さん：アスチルベ・アレンジー「ファナル」**7**のように、芽吹き時期は葉が赤黒く、夏は緑葉へと変化する品種を選ぶと、季節ごとのドラマも生まれます。花だけでなく、植物の全体像で捉えることが庭づくりの醍醐味です。



2 ルーコセプトラム ジャポニカム 'オーレウム'
Leucosceptrum japonicum f. aureum



3 セダム 'マトロナ' *Sedum 'Matrona'*



4 ミスカンサス 'コスモポリタン'
Miscanthus sinensis var. condensatus 'Cosmopolitan'



6 ペルシカリア・アンプレクシカウリス
'ファイヤーテール'
Persicaria amplexicaulis 'Firetail'



7 アスチルベ・アレンジー 'ファナル'
Astilbe 'Fanal' (x arendsii)
夏の姿



8 ペンステモン・ジギタリス「ハスカーレッド」
Penstemon digitalis 'Husker Red'

銅葉のサラシナショウマがフォーカルポイントに

寒い季節の枯れ姿

～寒い時期の庭で楽しめる葉や姿はありますか。
敬子さん：ここでも、雪に埋もれるまでは枯れた姿を楽しめます。エキナセアやルドベキアの花後の芯、黄色に輝くグラスの紅葉や枯れ葉などは、冬の光の中で非常に美しいものです。

～雪の少ない地域なら、より長く楽しめそうですね。

敬子さん：ペンステモン・ジギタリス「ハスカーレッド」⁸は、冬になると地面に近い葉が黒々としたロゼット状に残り、常緑のように彩りを添えてくれます。

植物の性格との付き合い方

～植えた植物が大きくなりすぎたり、増えすぎたりして困るという声も聞きます。

敬子さん：最終的な草丈を確認して植えるのが基本です。私たちの庭では、大きく育ったグラスの弱り切った中心部を掘って新しい土と苗を入れ、長期間遜色なく見せる工夫もしています。また、地下茎ではびこるタイプは、あらかじめ限られた場所に植えるなど、その植物の性格を知ることが大切です。苗を販売する時には、あえて「これははびこりますよ」という情報もセットで発信するよう努めています。



左から 代表取締役社長の大森康雄さん、謙太郎さん、敬子さん

～実際に育てているからこそ、説得力あるアドバイスですね。

敬子さん：ぜひ一度、モデルガーデンに足を運んでみてください。同じ場所でも季節ごとに表情は変わります。花が咲いている時期に限らない、深みのある「庭の見方」が広まれば、私たちの庭文化はもっと素晴らしいものになるはずです。

2026年は？

～今年のラインナップや、今後の活動についてお聞かせください。

謙太郎さん：今年は品種数を大幅に増やし、1,200品種以上を扱う予定です。カタログやウェブサイトの準備を急いでいます。

敬子さん：宿根草やグラス、新たに紹介する樹木まで、私たちが納得したものを揃えました。モデルガーデンは、4月25日にグランドオープンを迎え、カフェでのミニコンサートも予定しています。

ガーデンは生き物です。一度見たから同じだと思わずに、進化し続ける姿をぜひ見に来てください。ただ眺めるだけでなく、植物の背景を知ること、庭の楽しみ方を深めていけば、日本のガーデン文化はもっと豊かになっていくと信じています。

※植物名のカタカナ表記は、大森ガーデン・オンラインカタログに準じました。画像提供：大森ガーデン(特集記事・表紙共)

大森ガーデン

北海道、十勝・広尾町で、1973年、十勝大森牧場から始まった歴史あるナーセリー。宿根草を中心に1,000品種以上を生産管理している。植物の育つ姿を見られるモデルガーデンは、生産拠点ならではの圧倒的な植栽の美しさと、洗練されたカフェやショップが融合した癒やしの空間である。

OMORI GARDEN 大森ガーデン
〒089-2446 北海道広尾郡広尾町字紋別14線73番地
ウェブショップ <https://omorigarden.shop-pro.jp/>
※大森ガーデンの植物はウェブショップで購入可能です。

Comment

ナーセリー・坂口 則夫 Norio Sakaguchi オーナー・ガーデナー



坂口則夫さんが植物の世界に身を投じたのは40歳を過ぎてから。実家は長野県で9代続く農家だったが、それまでは、華やかだがどこか地に足がついていない感覚の拭えない広告業界にいた。転機は友人とのイギリス視察で出会ったアシュウッド・ナーセリーの主、ジョン・マッシーさんとの出会い。「材料も場所も揃っている。植物をやってみたらどうだ。」その一言に背中を押され、43歳でズーニー・カンパニーを設立し、クリスマスローズの育種を始めた。

現在取り組むのは、現地調査も続けている中国の原種H.チベタヌスだ。日本の土に種子をまき、芽吹かせ、選抜し、気候に順応させる作業を経て、日本人の感性に響く繊細な美しさを模索している。目指すのは、植物本来の自然な姿だ。

植物を通じたコミュニティ再生にも力を注ぐ。英国トッドモーデンでの経験を基に、地域で野菜や果樹を育て共有するエディブルガーデンの普及に尽力している。荒廃した空き地や公園をエディブルガーデン化するプロ



エディブルな街トッドモーデンのメアリー・クレアさんと

ジェクトは、子供たちと共に校庭を耕し収穫する活動や、ミツバチが戻る街づくりへと広がっている。

土に根ざした「育てる」世界で、今も、坂口さんの探究心は衰えない。効率や利益を優先する現代、植物が持つロマンをいかに次世代へ繋ぐか。その問いに対する答えを、日々の育種と地域活動の中に描き続けている。



育種ハウス内のH.チベタヌス交配種群

坂口 則夫さんから3つのコメント

- 1 「植物本来の健全な美しさ」自然の理にかなった凛とした姿にこそ、真の美しさが宿る。誰が見ても美しく、ミツバチも集まる生命力に溢れた姿を追求したい。
- 2 「植物を通じてコミュニティ再生を」食べられる植物を育てるエディブルガーデン活動は、地域の環境や機能を高める役割を担える。種をまき、育て、食べる体験は、地域社会の豊かな関係を育めるのではないかな。
- 3 「植物が持つロマンを伝えよう」人間が植物と共にどう豊かに生きられるか。自分の活動を介して、若い世代や地域の人々と共有し続けたい。

植物への真摯な姿勢と、絶えぬ探求心の源泉に迫ります。

ナーセリー・穴戸 克博 Katsuhiko Shishido 植物生産業

茨城県つくば市で、山野草を中心とした苗づくりに取り組む穴戸克博さんは、植物を「相棒」と呼ぶ。氷点下5度の冬の朝、鉢が凍てつく中で「俺が悪かった、頑張ってくれ」と植物に謝り、声をかける。その姿は、旧知の友と語りうかのようなのだ。



穴戸さんの植物人生は、福島で盆栽業を営む父から「同じ仕事はするな」と言われたことに端を発する。大学では農獣医学部で公害問題を研究し、現場での調査や成分分析に明け暮れ卒論を完成させた。その探求心は、卒業後の海外での活動でも発揮される。ドイツやスイスのナーセリーを巡り、現地のマイスターから山野草の生態や栽培、保護を学んだ。時には言葉の壁や厳しい検疫、国際的な植物ブームの荒波に揉まれながらも、野生種が持つ本来の力強さや可憐さを追い求めてきた。



ガーデンコテージのモデルハウス。植栽の提案も

1980年代には、メモリーわずか64KBのPCを駆使して自らプログラムを組み、自分で始めたナーセリーの植物苗カタログを作成。デジタル黎明期の苦勞も、植物のためと思えば厭わなかった。

福島での生産業に一区切りをつけ、現在は「Hgarden」で息子の優さんと協力しながら、本格的な生産再開に向けて少しずつ作業を続けている。8,000種を超える植物を育て上げてきたその手は、今も市場トレンドや変化していく気候を見据え、小さなポットひとつひとつに向き合っている。



ハウスで春を待つポット苗

穴戸 克博さんから3つのコメント

- 1 「植物は『相棒』である」植物の声を感じ取れるように対話する感性は、植物と向き合う上での原点となるのではないかな。
- 2 「探求心を持ち続けて、実践する」権威や常識に縛られず、自ら考え、手を動かすことを心がけたい。失敗しないとわからないことも多い。
- 3 「自然の力への敬意と、本質的な豊かさの追求」珍しい植物に触れ、それを取り巻く経済を見てきたからこそ、植物が持つ本来の生命力と素朴で誠実な人間の思いの大切さを知った。

スカイブルー・セト

Skyblue Seto



1 瀬戸啓一郎さん(育苗温室にて)

著名なリンドウのナーセリー

2月の冷涼な空気の中、長野県の中央アルプスと南アルプスに囲まれた天竜川沿いの地を訪れた。標高約800メートルの扇状地に位置するスカイブルー・セトは、リンドウの育種から育苗、切り花生産までを手がける全国屈指のナーセリーである。2代目社長の瀬戸啓一郎さんに案内された敷地には、ガラス室の育苗温室が並び、切り花生産者への出荷を待つ実生苗や栄養繁殖苗が整然と配置されていた¹。事務所の傍らには、胚珠培養やメリクロンを行うための培養室²、さらには切り花の出荷場が完備されている。切り花の圃場³は、その多くが風通しの良い、隣接する南箕輪村の適地に点在し、総面積は5ヘクタールに及ぶ。



2 培養室内クリーンベンチでの無菌培養作業



3 開花期の露地圃場
高性種は倒伏防止用のネットを利用

家業の継承と日本農業への貢献という志

啓一郎さんの父 堯穂(たかほ)さんが、北隣の辰野町で複合農業からリンドウ栽培へと舵を切ったのは、約50年前のことである。農業改良普及員からリンドウ栽培を勧められ、当時栽培が盛んだった茅野市で研修を始めたのだ。理想の個体を求めて始まった品種改良はやがて結実し、新品種を次々と世に送り出した。啓一郎さんが家業を継いだ経緯は、父が事業拡大の際に息子を保証人にするという、なかば強引な作戦によるものだったという。

農業者大学を卒業後、現場で栽培管理の基礎を叩き込んだ啓一郎さんは、その後ニュージーランドやタイでの海外生産にも挑戦し、知見を広げた。「リンドウで日本農業と花文化の発展に寄与する」という経営理念のもと、現在は苗の生産と提供に留まらず、全国の生産者への栽培指導や情報交換にも力を注ぐ。また、SNSを通じて花店や消費者のニーズを直接汲み取り、品種改良や生産に反映させる柔軟な姿勢も、現代のナーセリーとしての大きな特徴である。

栽培技術と品種改良

切り花生産の9割は露地で行われている。センチュウ・土壌病害を避けるため、稲作農家の協力を得て、5年間のリンドウ栽培後に水田へ戻すという生産体系を構築しているのが興味深い。一方温室では、加温して切り花の出荷を早めている。リンドウの開花は積算温度で決まるからだ。



4 *Gentiana triflora* var. *japonica* 'パステルベル'



5 *G. scabra* var. *buergeri* 'モダンブルーNo.1'



6 G. 'F1ブルー'



7 G. 'パールブルー'



8 G. 'アルペンベル'



9 頂部に花がつくG. 'アルペンライトブルー'はブーケに利用しやすい

切り花用苗は、ササリンドウは種子と挿し木、エゾリンドウは種子で繁殖をおこなう。1月の厳冬期に温室内を15℃に保って播種を行い、4月下旬から5月の定植までに十分な株の大きさを確保、2年目から収穫できるようにする。

品種改良で目指すのは、冠婚葬祭から日常使いまで幅広く対応できる品種だ。仏花としての利用が中心だった時代は、草丈が高く、花の段数が多い、大きく濃い色のものが良しとされていた。しかし最近では、しなやかで淡い色合いの、他種とも調和する品種が好まれる傾向があり、白と青の花を交配した複色のものや、九州由来の桃色リンドウを親にした、ピンク花の品種も作出した。

採種においては、かつての屋外作業から、切り花状態での屋内交配・採種へと切り替え、栄養剤を活用して、確実な種子収穫を実現している。近年の猛暑対策としては、標高の高い適地への移動や、ハダニ防止のための疎植を徹底している。ササリンドウとエゾリンドウの交配による雑種強勢を活かし、高温障害に強い品種の開発にも成功した。こうした地道な技術の積み重ねが、スカイブルー・セトへの信頼を支えているのだ。



10 フラワーアレンジメントに向くタイプ

多様なニーズに応える個性豊かな品種群

近頃のトレンドである、淡い色調やしなやかさを捉えた品種も含め、紹介する。

'パステルベル'⁴は、白地にライトブルーが乗る複色。6月下旬から開花する極早生系統だ。'モダンブルーNo.1'⁵は、鮮やかなブルーの八重咲き。低温や暗所でも花が閉じない画期的な性質を持つ。'F1ブルー'⁶は、ササリンドウとエゾリンドウの交配種。耐暑性に優れ、高温でも花色の退色が少ない。淡いブルーの花色が爽やかな'パールブルー'⁷も、暑さに強い。'アルペンベル'⁸は、小輪のかわいらしい花をつけ、しなやかな草姿を持つ草花系。ブーケやアレンジメントに最適な逸品である。

リンドウの新たな価値を次世代へ届ける

生産者の高齢化や気候変動といった課題に直面する中、2024年度から自社の、切り花の売上が苗の売を上回るようになった。今後は切り花生産の比重を高め、より冷涼な茅野市などでの生産拡大も視野に入れている。「リンドウを、仏花としてだけでなく日常の生活に届けたい」と啓一郎さんは語る。従来のしっかりと直立する姿だけでなく、柔らかい草姿やニュアンスカラーを持つ「リンドウらしくない」品種^{9・10}を普及させることで、現代のライフスタイルに合ったリンドウの在り方を模索している。伝統を守りつつも、変化を恐れずに挑戦を続けるその姿に、リンドウの確かな未来を見た。(取材:事務局)

※注「ササリンドウ」は、和名「リンドウ」・学名 *Gentiana scabra* var. *buergeri* と同義ですが、文中ではリンドウ属全体を表す語と区別するため、こちらの呼称を用いています。

有限会社スカイブルー・セト

〒399-4601 長野県上伊那郡箕輪町中箕輪11260-215

TEL: 0265-79-0203 FAX: 0265-71-1300

E-mail: sbseto@fuga.ocn.ne.jp



facebook